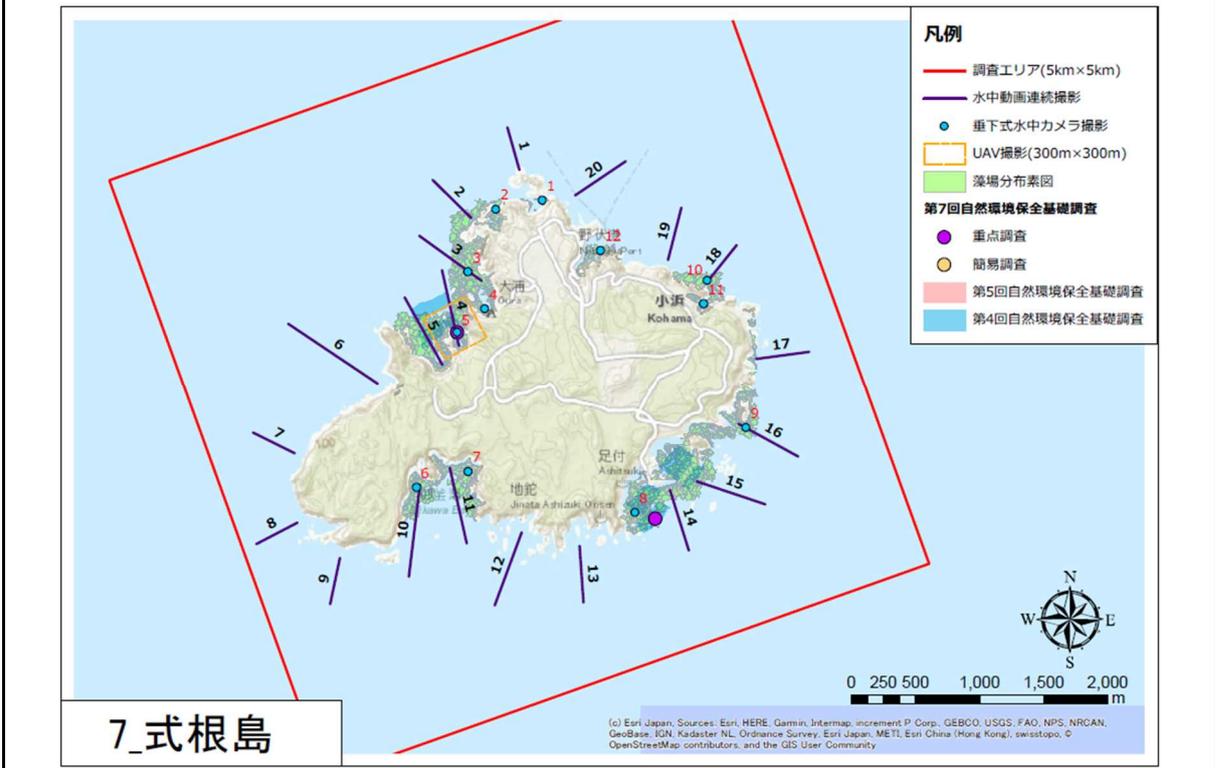


(1) 調査海域名	中部太平洋沿岸海区 式根島
(2) 調査海域の所在	東京都新島村式根島周辺

(3) 調査海域及び調査位置図



(4) 調査位置の詳細 (JGD2011)

詳細な位置情報は掲載しておりません。詳細な位置情報を希望される場合は、藻場調査ウェブサイトの「現地調査の結果」の「調査結果(データ)」をご覧ください。

【水中動画連続撮影】

ライン番号	岸側基点		沖側基点		測線距離 (m)
	緯度	経度	緯度	経度	
1	-	-	-	-	288
2	-	-	-	-	350
3	-	-	-	-	500
4	-	-	-	-	501
5	-	-	-	-	500
6	-	-	-	-	696
7	-	-	-	-	301
8	-	-	-	-	299
9	-	-	-	-	306
10	-	-	-	-	599
11	-	-	-	-	501
12	-	-	-	-	504
13	-	-	-	-	367
14	-	-	-	-	410
15	-	-	-	-	467
16	-	-	-	-	438
17	-	-	-	-	344
18	-	-	-	-	300
19	-	-	-	-	350
20	-	-	-	-	395
総測線距離					8,414

【垂下式水中カメラ撮影】

スポット 番号	緯度		経度	
1	-	-	-	-
2	-	-	-	-
3	-	-	-	-
4	-	-	-	-
5	-	-	-	-
6	-	-	-	-
7	-	-	-	-
8	-	-	-	-
9	-	-	-	-
10	-	-	-	-
11	-	-	-	-
12	-	-	-	-

【 UAV 撮影（オーバーラップ撮影）】

スポット 番号	緯度		経度	
A	-	-	-	-
B	-	-	-	-
C	-	-	-	-
D	-	-	-	-

(5) 調査年月日 令和元年7月22日、23日、8月27日

(6) 調査者 三洋テクノマリン株式会社 代表：北野慎容

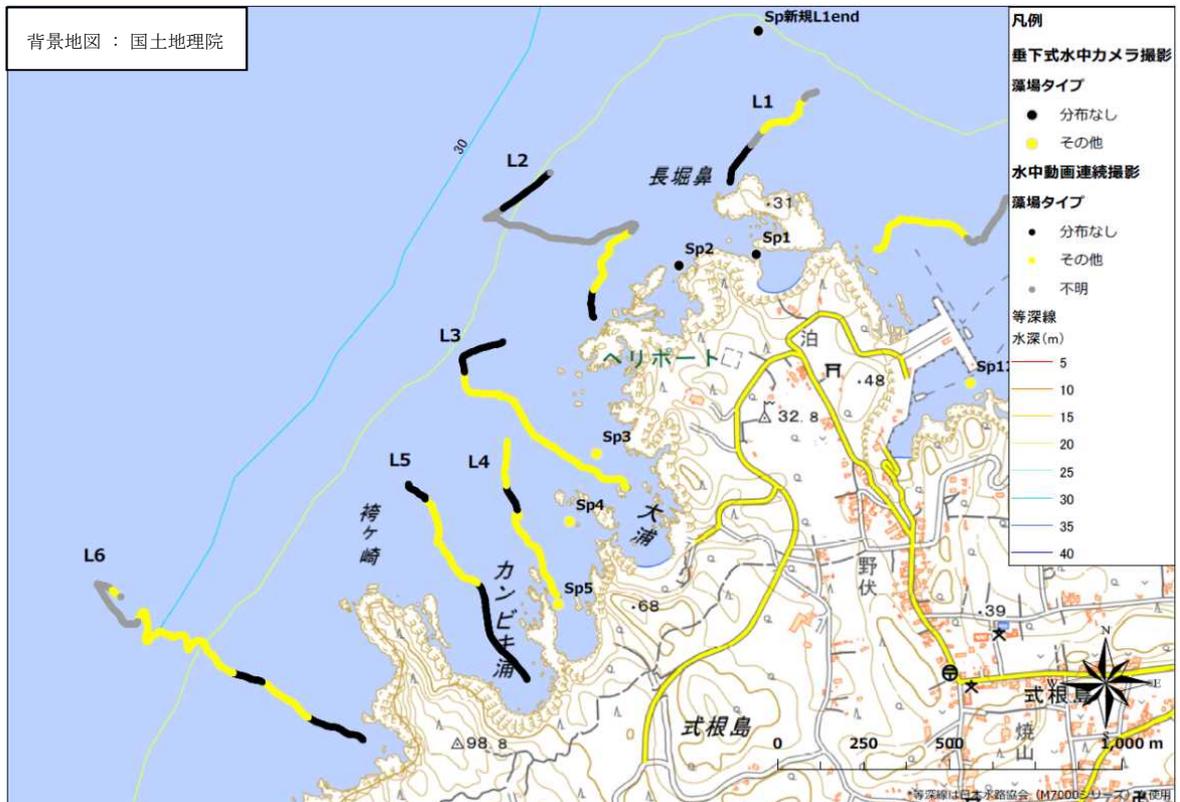
(7) 調査海域の概要

岩礁域ではアントクメを中心として、その他にヒジキやヤツマタモク、アカモク等のホンダワラ類や、マクサやフタエモク等の小型海藻が生育する海域である。なお、本海域は環境省の『生物多様性の観点から重要度の高い湿地』に選定されている。年間平均風速は8.0 m/sを以上であり、洋上風力施設設定可能な海域（極浅海域・砂質域）が近隣に存在する。

《参考》第7回自然環境保全基礎調査

(8) 調査結果

【水中動画連続撮影】○測線1～6の状況



測線 1 の状況：水深約 15～42 m で、岸よりは岩礁、40m 以深は砂質を主体とする測線であった。海藻草類はほとんどみられなかった。

測線 2 の状況：水深約 19～47 m で、岩礁を主体とする測線であった。水深約 27～32m で、テングサ属（被度 10～20%）、アオサ属（被度 5～20%）等の海藻がみられた。

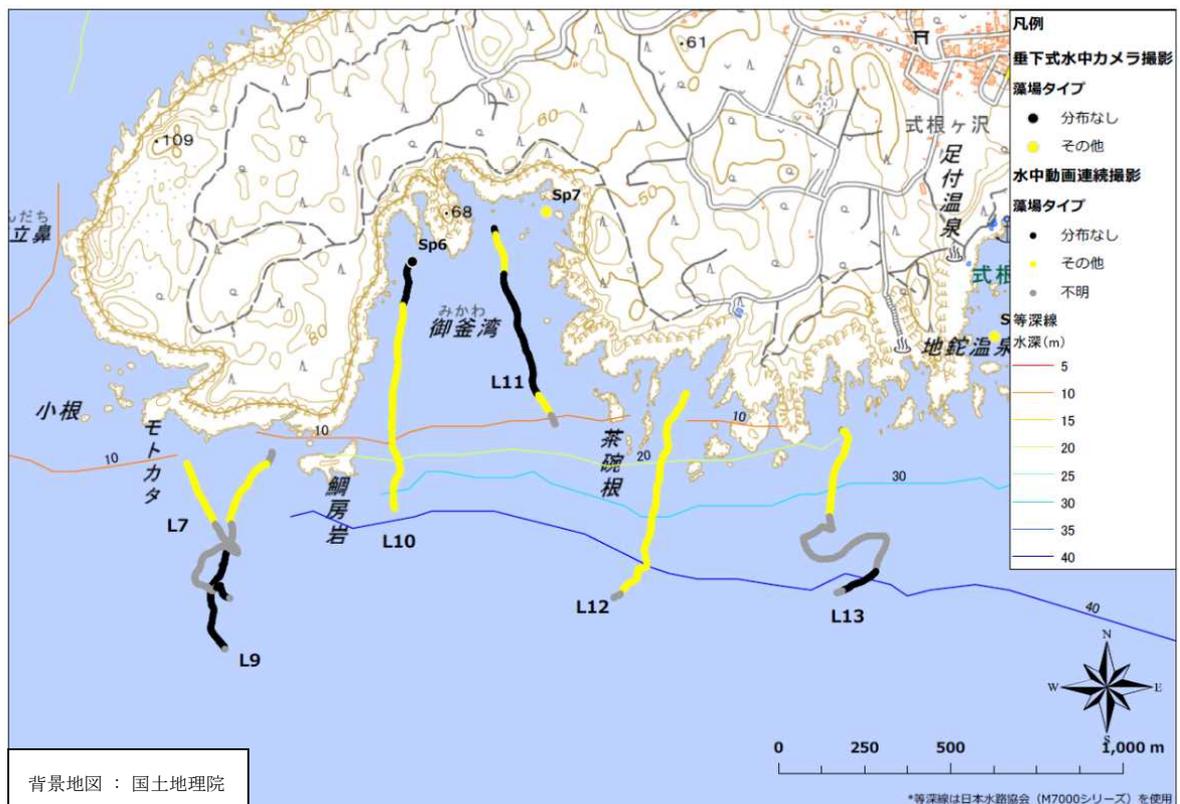
測線 3 の状況：水深約 6～29 m で、岸よりでは岩礁と砂質域が混在し、沖側では岩礁域となる測線であった。岸側ではテングサ属（被度 10～20%）がみられたが、水深約 6～12m では低被度（被度 5%未満）となった。水深約 25m 以深では、アオサ属（被度 10%）の海藻がみられた。

測線 4 の状況：水深約 7～25 m で、岩盤、礫や砂・泥が混在する測線であった。測線全体で、紅藻類（被度 5～10%）、褐藻類（被度 5%未満）、アオサ属（被度 5%未満）の海藻がみられた。

測線 5 の状況：水深約 3～32 m で、岩盤と礫や砂が混在する測線であった。測線全体で褐藻類、紅藻類、緑藻類が低被度（被度 5%未満）でみられた。

測線 6 の状況：水深約 7～50 m で、岩礁と礫や砂が混在する測線であった。水深約 25～28m でアオサ属（被度 10%）がみられ、水深約 37～42m で紅藻類、緑藻類、アミジグサ科の海藻が被度 5%未満でみられた。

○測線 7、9～13 の状況



測線 7 の状況：水深約 15～40 m は岩礁、40m 以深では砂質域となる測線であった。水深約 15m～40m では、テングサ属（被度 5%未満～10%）、アオサ属（被度 5%未満～20%）の海藻がみられた。水深約 40m 以深では海藻草類はみられなかった。

測線 9 の状況：水深約 21～57 m で、岩塊・巨礫と砂質域が混在する測線であった。紅藻類（被度 30%）、緑藻類（被度 10%）がみられた。

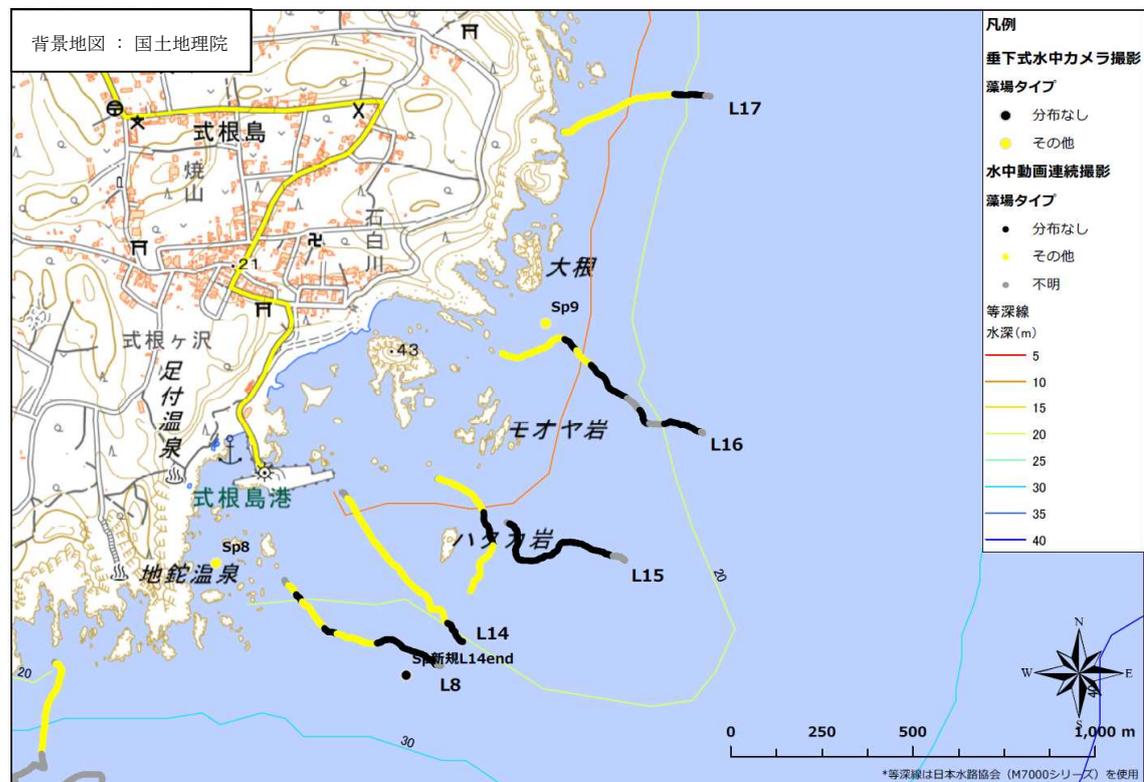
測線 10 の状況：水深約 6～42 m で、岩礁域と砂質域が混在する測線であった。水深 10m までは海藻草類はみられなかったが、水深約 9～27m では、紅藻類（被度 5%未満）、水深約 28m～42m では、テングサ属（被度 20%）、アオサ属（被度 5%未満）の海藻がみられた。

測線 11 の状況：水深約 10～25 m で、砂質域に岩礁が混在する測線であった。水深約 12m～14m の岩礁上には紅藻類（被度 5%未満）がみられた。

測線 12 の状況：水深約 7～55 m で、岩盤を主体とし、礫、砂・泥が混在する測線であった。水深約 7m～13m ではテングサ属（被度 5～10%）、アミジグサ科（被度 5%）の海藻がみられた。水深約 13m 以深では、主に紅藻類（被度 10%～40%）でみられた。水深 54m 以深では緑藻類（被度 5%未満）がみられた。

測線 13 の状況：水深約 14～52 m で、岩盤を主体とする測線であった。測線全体において、紅藻類（被度 10%～30%）がみられた。

○測線 8、測線 14～17 の状況



測線 8 の状況：水深約 26～37 m で、岩盤、礫、砂・泥がみられ、テングサ属（最高被度 30%）が一部でみられた。水深 34m 以深の砂質域では、海藻草類はみられなかった。

測線 14 の状況：水深約 9～31 m で岩盤が主体となる測線であった。水深約 9～30m では、紅藻類（被度 5%未満～被度 10%）、一部にアミジグサ科（被度 5%未満）、アオサ属（被度 30%）の海藻がみられた。水深 30m 以深では海藻草類はみられなかった。

測線 15-1 の 水深約 9～30 m で、岩礁と砂質域が混在する測線であった。測線全体で、紅藻類（被度 10～30%）がみられ、水深 28 m 以深ではアオサ属（被度 10%～30%）が混在した。

測線 15-2 の 水深約 23～27 m で、測線全体に砂地で岩礁が一部に点在する測線であった。状況：海藻草類はみられなかった。

測線 16 の状況：水深約 15～25 m で岸よりでは岩盤、沖側では砂質となる測線であった。岩盤上では紅藻類（被度 10～30%）、アオサ属（被度 5%未満～20%）の海藻がみられた。砂質域では、海藻草類はみられなかった。

測線 17 の状況：水深約 14～34 m で、岸よりでは岩盤域、水深 20 m 以深では砂質域に岩礁域が混在する測線であった。水深約 14～25m までは、紅藻類（被度 10～20%）やアオサ属（被度 5%未満～5%）でみられた。水深 25m 以深の砂質域では海藻草類はみられなかった。

○測線 18～20 の状況

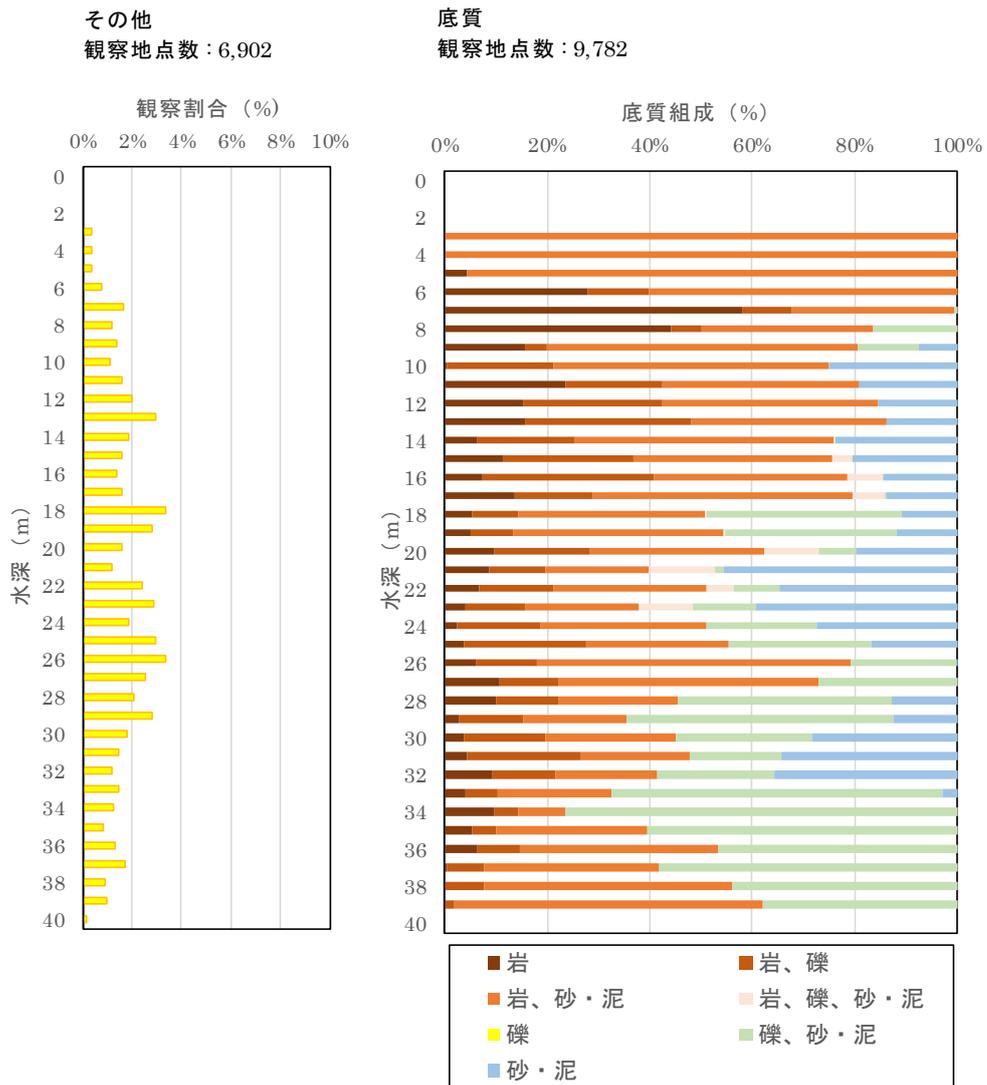


測線 18 の状況：水深 11～31 m で、岸よりは岩礁と砂質が混在する測線であった。測線全域において、紅藻類（被度 5%未満～10%）、褐藻類（被度 5%未満～30%）、アオサ属（被度 10%）の海藻がみられた。

測線 19 の状況：水深約 11～22 m で、岸よりでは岩礁、沖合では砂質と礫が混在する測線であった。岩礁域では、褐藻類（被度 5%未満）、アオサ属（被度 5%未満）の海藻がみられた。水深 20m 以深ではミル属（被度 5%未満）も混在した。

測線 20 の状況：水深約 15～31 m で、岩礁域と砂質域が混在する測線であった。岩礁域では、紅藻類、ナガミル、アオサ属などの海藻がいずれも被度 5%未満でみられた。

【各藻場タイプにおける鉛直頻度分布図】



注：観察割合 = 各藻場タイプが観察された地点数 / 総観察地点数 10,978 地点

【垂下式水中カメラ撮影】

垂下式水中カメラ撮影の結果は以下のとおりで、岩盤上にアミジグサ科やその他紅藻類、アオサ属、ナガミル等の海藻がみられた。

地点番号	水深 (m)	主要な構成種	底質	備考
Sp1	3.0	分布なし	1, 4	-
Sp2	10.5	分布なし	1, 4	-
Sp3	5.6	紅藻類 10%	1	-
Sp4	7.0	紅藻類+	1, 3	-
Sp5	7.5	紅藻類+	1, 4	-
Sp6	5.6	分布なし	1, 4	-
Sp7	5.3	紅藻類+	1, 3	-
Sp8	6.0	紅藻類 40%、アミジグサ科+	2, 3	-
Sp9	15.1	紅藻類 40%、アオサ属+	1	-
Sp10	13.3	紅藻類 30%、アミジグサ科+、アオサ属+	1, 3	消波ブロックあり
Sp11	5.5	紅藻類 10%	1, 3	-
Sp12	8.4	ナガミル 10%、アミジグサ科+、紅藻類 10%	1, 3	-
Sp 新規 L1end	45.0	分布なし	3, 4	砂地に岩石が散在する
Sp 新規 L14end	35.7	分布なし	2, 4	砂地に岩石が点在する



紅藻類 水深約 5 m



紅藻類 水深約 13 m



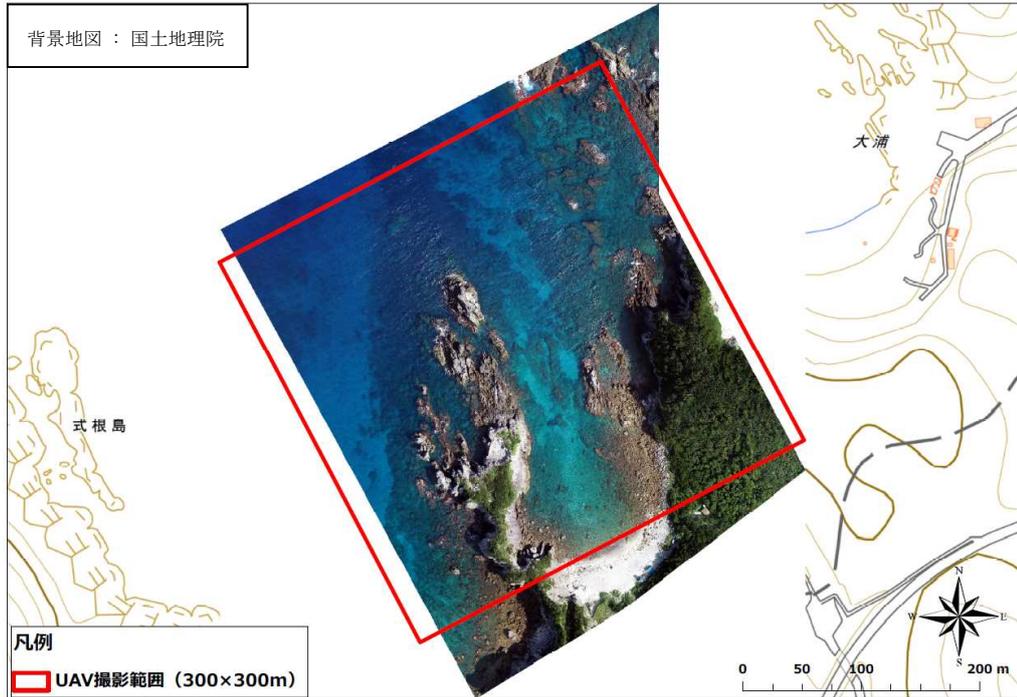
アオウミガメ_水深約 6 m



ナガミル_水深約 8 m

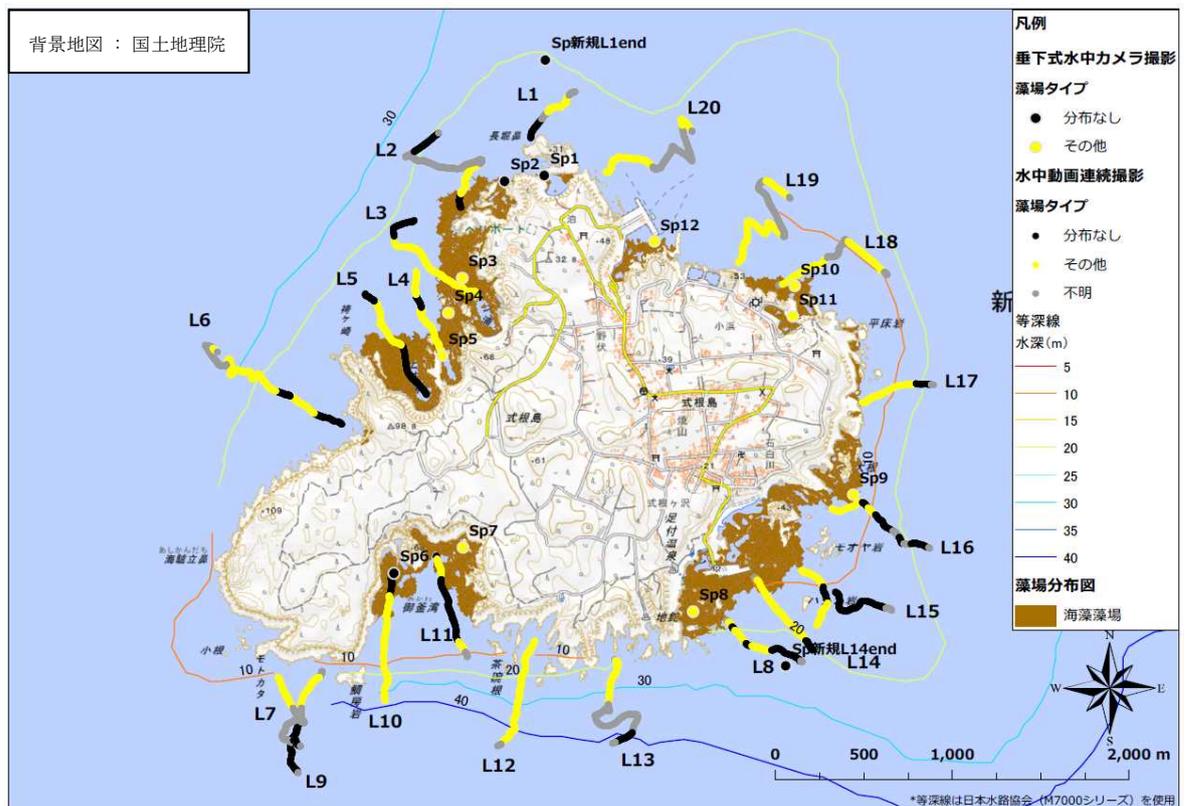
【UAV 撮影】

300m 四方のオーバーラップ撮影の結果、300m 四方ほぼ全域でオルソ化された。海域の一部では、低輝度の海藻らしい影がみられた。



撮影時間	潮位 (m)	風向・風速	波高 (m)	撮影高度 (m)	備考
8:57~9:10	CDL 1.34 m	N・1.0 m/s	0.2 m	149 m	-

(9) 藻場分布図



(10) まとめ

ほとんどの測線において、岸よりは岩礁・巨礫、沖合は砂質域となった。岩礁域では概ねテングサ属、アミジグサ科、緑藻類のアオサ属等の小型海藻が確認され、被度は10~30%程度であった。砂質域ではアマモ等の海草はみられなかった。

既往知見で分布が確認されているアントクメが本調査では確認されず、その要因については不明であった。飯島（2013）は、伊豆大島の定点観測の結果、平成24年以降アントクメが減少し、その一因として一部に魚類によると思われる食痕が確認されていることから魚類による食害が影響しているとする一方で、駒沢（2015）は、アントクメについては魚類を含めた食害の有無に関する情報はないとしており、本調査でアントクメが確認されなかった要因については、今後の課題である。

飯島純一（2013）：伊豆大島におけるアントクメスポアバック追跡調査（スポアバックの効率的な運用を目指して），東京都島しょ農林水産総合センターHP，平成25年度主要成果集。
駒沢一朗（2015）：暖海性コンブ目藻類アントクメの生理、生態および増殖に関する研究，博士学位論文，184pp.

(11) その他特記事項

藻場分布素図において「海藻藻場」とされている領域で、大型褐藻類はみられなかった。UAV撮影は海水浴客が多いため、人の少ない早朝の時間帯に実施した。



周辺状況（測線11）



周辺の漁具（地点5）



周辺状況（地点6）



周辺状況（測線10）

